

## 令和5年度社会医学実習テーマ

### 1. 後期高齢者における残存歯数の関連要因：一般健診結果からの検討(関根教授:10人程度)

残存歯数は高齢者における QOL の決定要因である。残存歯数が減少すると、低栄養を介した虚弱など健康寿命の低下をもたらす。そこで、後期高齢者の一般健診データを用いて、喫煙習慣などの生活習慣や糖尿病などの生活習慣病と残存歯数の関連性を評価して考察する。

### 2. 後期高齢者における残存歯数の関連要因：歯科健診結果からの検討(関根教授:10人程度)

残存歯数は高齢者における QOL の決定要因である。残存歯数が減少すると、低栄養を介した虚弱など健康寿命の低下をもたらす。そこで、後期高齢者の歯科健診データを用いて、歯周疾患や歯石沈着などの歯科関連異常と残存歯数の関連性を評価して考察する。

### 3. 近視、斜視と生活習慣の関連(山田准教授:10名程度)

近年青少年の近視(視力 1.0 未満)が増加している。近視は遺伝的な影響(眼軸の延長)によって生ずると考えられていたが、親の世代よりも近視の割合は増加し、その発症は若年化している。この理由には近業(近くを見る作業)の増加や野外活動の減少が指摘されている。また後天性内斜視の増加も報告されている。そこで今回の実習では近業と近視、斜視に関する文献調査と、視機能の測定機器を用いた調査を行う。

### 4. 富山県内の健診・医療レセプトのビッグデータ分析(山田准教授:10名程度)

富山県内の人口は約 100 万人で、国民健康保険の加入者(被保険者)が約 23 万人、後期高齢者医療広域連合の加入者は約 18 万人である。この健診・医療レセプトのビッグデータを分析し、地域の保健活動に役立つ資料を作成する。

### 5. 働く人の Well-being 関連要因と職場改善要因の検討(立瀬助教:10名程度)

富山県では「Well-being」の成長戦略を掲げており、働く人の総合的な健康指標をして Well-being の向上が求められている。今回県内企業で行った Well-being 調査データを利用して、働く人における Well-being 関連要因を検討する。また働き方改革やストレスチェック制度により職場の環境改善が求められているが、Well-being 向上の視点からどのような職場の環境改善が重要となるのかその因子を抽出する。

### 6. コロナ禍における自殺率の変化の検討(立瀬助教:10名程度)

コロナ禍では、自殺率が増加を示しただけでなく自殺率の季節変動なども通年とは違う変化を見せた。長引くコロナ不況の影響が大きく取り上げられているが、具体的にどのような社会現象が深刻化した時にコロナ禍での自殺が増加しているのか既存のデータを用いて自殺率の変動を検証する。またコロナ禍における自殺の都道府県格差の変化についてもデータでの検討を行う。

**7. 小児環境保健の世界の取組み(稲寺教授:10名程度)**

子どもの成長や発達に影響を及ぼす環境要因を明らかにする目的で、世界では多くのコホート調査が行われている。小児環境保健の世界の取組みについて概観する。

**8. わが国の少子化問題を考える(稲寺教授:10名程度)**

年間出生数が80万人を割り少子化対策は待ったなしの課題である。少子化の原因、これまでの対策はなぜ有効でなかったか、今後どのような対策が必要かについて議論し、現実的な対策を提言する。

**9. スマートフォンを用いた血圧推定精度の日常生活下における検証(松村講師:10名程度)**

高血圧は心臓血管系イベントのリスク要因であるが、日常生活下における血圧測定は容易でない。しかし、万歩計や歩数計のように簡単に身につけての測定が可能になれば、公衆衛生学領域における潜在的メリットは大きいと思われる。そこで本実習では、スマートフォンによる生体計測とGuytonの循環基本式の組み合わせから血圧を推定する方法に注目し、スマートフォンだけを用いて果たして血圧をどの程度まで正確に推定できるかを検証する。

**10. 最近の若者は「草食系」か?(松村講師:10名程度)**

最近の若者は「草食系」だといわれる。ある個人の恋愛傾向はその後の人生に大きな影響を与えると考えられるが、これと関係する神経科学的基盤、性格傾向、社会背景にはどのようなものがあるだろうか? 本実習では、Lee(1977)の恋愛色彩理論に注目し、6種類の特徴的な恋愛傾向の生理学的基盤(あるいは、関連要因)に関する文献調査を行うと共に、アンケート実施を通して大学生の恋愛傾向について調査する。

**11. 身体不活動者が活動しやすい環境づくりを検討するための文献調査(土田助教:10名程度)**

WHO身体活動および座位行動に関するガイドラインから、一般的な成人は週に150~300分の中強度の有酸素運動を行うことを推奨されている。しかし、この基準を達成できていない身体不活動者は非常に多い。本研究では、身体活動を妨げる要因や不活動者にも取り組みやすい活動を文献調査により取りまとめ、不活動者が活動しやすい環境づくりを検討する。

**12. 身体活動量アップのための五福キャンパスマップ制作(土田助教:10名程度)**

適度な身体活動習慣を有することは、全死因死亡率を減少させ、様々な身体的・心理的健康の増進に有効とされている。昨年度の社会医学実習で、本学の学生・教職員の身体活動量アップを目的とした杉谷キャンパスウォーキングマップを作成し公表した。今年度は、五福キャンパス版を作成し、キャンパスライフの中で実行可能な身体活動方法を学生・教職員に提案する。